

# 日本インターンシップ<sup>o</sup>学会 第4回榎本記念賞 審査結果報告

# 榎本記念賞の創設と意義

- 元大阪経済大学教授で初代関西支部長であられた榎本淳子（まきもとじゅんこ）先生から「秀逸なるインターンシップ」の発展を願い頂戴したご寄付をもとに創設
- 2011年度以来、榎本記念賞WGにおいて「秀逸なる事例とは何か」について検討を重ね、インターンシップの発展と高度化を願い、「秀逸なインターンシップ」事例の収集および選定を行っている。
- 2015年に第1回目の選定を行い、7事例を表彰。2017年の第2回目は5事例、2019年の第3回は5事例を表彰。
- 本年（2021年）は第4回目の選定を実施

# 選考対象

- **大学・短大、高専、専門・専修学校、  
中学校・高等学校等の事例**
- **日本インターンシップ学会会員であり、  
2019年6月から2021年5月末迄の  
2年間に学会大会、支部研究会で発表、  
講演等により披露した事例**
- **上記の期間に発表や講演等した事例のな  
から各支部より推薦を受けた事例が対象**

# 評価項目

No	項目	内容
1	制度・組織	教育としての位置づけやリスクマネジメント等、学校が制度として組織的に取り組んでいる。
2	内容	事前事後指導や関連領域の学修等、内容が充実しており、そのことが、シラバスやプログラム説明の資料等から読み取れる。
3	受入先との連携	協働先として適切な受入先が確保されており、継続性がある。
4	醸成される力	専門能力または汎用能力など学生のどのような能力等が醸成されたのかが、具体的な事象やデータ、証言などから認められる。
5	受入先からの評価	学生の行動力や能力等について受入れ先から高い評価を受けているか、具体的な事象やデータ、証言などから認められる。
6	受講生の評価	参加した学生から高い評価を受けているか、具体的な事象やデータ、証言などから認められる。

# 審査方法

- ・ 評価項目8項目のうち、2.運用と4.期間を除く6項目を各5点満点として、全体として30点満点で審査
- ・ 最も合計点が高いものを「最も秀逸」、2~5位まで「秀逸」として選定
- ・ 同点の場合は審査員の合議で決定
- ・ 審査員は学会表彰委員会メンバーとする（◎は委員長、○は副委員長）  
◎ 古閑博美、小林純、松高政、○眞鍋和博

今回、各支部から合計7事例を推薦いただき、下記のスケジュールにて選考

7月10日(土)

各支部より推薦事例のエントリーシート提出

7月12日(月)~7月26日(月)

学会表彰委員会委員による審査

結果取りまとめと各委員による最終確認

8月11日(水)

理事会に報告・承認

9月18日(土)

第22回学会大会にて表彰

# 第4回榎本記念賞の選定結果について

最も秀逸なる事例

**工学院大学** (二上武生氏)

秀逸なる事例

**山形大学** (山本美奈子氏 ※共同研究者：松坂暢浩氏 (山形大学))

**京都産業大学** (木村成介氏、山岸博氏、穂崎良典氏)

**MiraiShip** (野村尚克氏 ※共同研究者：牛山佳菜代氏 (目白大学))

**名古屋産業大学** (今永典秀氏、棚瀬規子氏 (NPO法人G-net))

# 最も秀逸なる事例

## 工学院大学 (二上武生氏)

### 低学年インターンシップの導入等、多様なインターンシップの展開

- ・ 学内のインターンシップへの理解と運営は手厚くまた手堅いと言えよう。20年以上に渡るインターンシップ実施の実績があり、多様なインターンシップとキャリア支援プログラムとしての体系化を図っていることは評価できる。
- ・ 担当副学長も含めた「インターンシップ委員会」を構成し、各担当で役割分担しつつ、全学一体となってインターンシップを推進する体制を構築している。内容に関しては、事前事後プログラムが充実していると言える。受け入れ先との連携については、良好な関係性を保つための努力がなされている。
- ・ 学年毎に異なった位置付けを意識して実践している点は高く評価できる。また成果についても言及が多い。

# 秀逸なる事例

## 山形大学 (山本美奈子氏 ※共同研究者：松坂暢浩氏 (山形大学) )

インストラクショナルデザインによるオンライン・インターンシップの設計と運営  
—産学連携による取組み—

地元密着型の地域インターンシップとして実績を積み重ねている。コロナ禍のインターンシップとして、山形県中小企業家同友会と産学共同でプログラムを開発し、オンライン・インターンシップに取り組み、リスクマネジメントにも注力している。

## 京都産業大学 (木村成介氏、山岸博氏、穂崎良典氏)

理工系専門教育に特化した中長期インターンシッププログラム「理工系コーオブ教育プログラム」の実践

理工系学部の長期間にわたるコーオブ教育のモデル的な実践であると考えている。また継続的な振り返り、学習内容の調整などが行われている。受け入れ先との連携においては、インターンシップ後の共同研究につながるような声が聞かれたり、学生の卒業研究への可能性も示唆されている。



# 秀逸なる事例

## MiraiShip (野村尚克氏 ※共同研究者：牛山佳菜代氏 (目白大学) )

### MiraiShipによるオンラインインターンシップ

メディア学部と企業との協力関係のもと、オンラインインターンシップを実施している。学生満足度が高く、メディア専攻に特化した内容は評価できる。学生は自己分析ツールである「ビノバージョン・レポート診断」をもとにインターンシップに向けた目標設計に取り組むなど丁寧な手順を踏んでいる。

## 名古屋産業大学 (今永典秀氏、棚瀬規子氏 (NPO法人G-net) )

### 地域企業の魅力発見インターンシップ

-地域企業を複数社体験するNPO法人G-netによるシゴトリップの事例より-

受入企業との連携において、3日間で各社1日のインターンシップを設定し多くの企業を確保していると同時に、アセスメントシートにより詳細に渡るフィードバックを受入先に実施している。このような取り組みが、受入企業の満足度の高さにつながっていると思われる。